

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520490

研究課題名（和文） 日本語方言における間投表現の使用の様相に関する研究

研究課題名（英文） Regional Variations in the Use of Interjections in Japanese

研究代表者

井上 文子 (INOUE Fumiko)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：90263186

研究成果の概要（和文）：間投表現（間投詞・間投助詞）は、方言によって多様な形態的な変異が見られる。間投表現に関して特徴的な重点地域を選定し、高年層・若年層の方言談話の収録調査を実施した。収録した談話は、文字化・共通語訳・注記付与をおこない、言語データとして利用できるように整備した。新規に収録した談話データと既存の談話資料を活用して、間投表現の形式を整理し、その地理的分布を概観し、実際の談話に現れた間投表現の使用状況・頻度・機能などについて分析を試みた。また、世代間・方言間の比較をおこなった。

研究成果の概要（英文）：There is a variety of expressions which are used as fillers (or interjections) in Japanese dialects. In this research, we compiled natural discourse data of the Osaka, Hiroshima and Kagoshima dialects including transcribed texts, translations in Standard Japanese and notifications, and by using the data and other natural discourse data which have been compiled before, we surveyed the formal variety of the fillers in Japanese dialects and their geographical distribution. In addition, we made a preliminary analysis on the semantic characteristics of the fillers in Japanese dialects, focusing on the contextual and sociolinguistic factors.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：間投助詞、間投詞、談話資料、地域差、世代差

1. 研究開始当初の背景

(1) 間投表現は、発話の過程における話し手の心的プロセスを表し、「強調」「注意喚起」「間の調整」など話し手と聞き手の関係調整の機能を有するという点で、話しことばによ

るコミュニケーションには欠かせない存在である。話しことばの研究が盛んになるにつれ、話しことば特有の表現である間投表現の研究も注目されてきている。

(2) 間投表現には、方言によって多様な形態的な変異が見られる。また、『方言文法全国地図』第6集(国立国語研究所)において間投表現が扱われ、ごく限られた場面ではあるが、主要な間投助詞の地理的分布や語形の境界を全国的な視野で把握できるようになった。

(3) しかし、間投表現にどのような表現があるか、あるいはどのような表現が間投表現として機能しているかということは、必ずしも網羅的にわかっているわけではない。また、間投表現は体系性や類型が見えにくいこともあり、間投表現の機能の方言差についても、まだ不明なことが多い。

2. 研究の目的

(1) 方言談話資料の収集・分析を通じて、日本語方言における間投表現(間投詞・間投助詞)の形式・分布・頻度・機能などの使用状況を把握する。

(2) 方言研究と話しことば研究において積み重ねられてきた知見をふまえながら、文法研究および談話分析の観点から、間投表現の使用実態に関する世代間・方言間の比較をおこなう。

3. 研究の方法

(1) 『全国方言資料』『方言談話資料』『全国方言談話データベース』といった方言談話資料や『方言文法全国地図』などの言語地図、各地の調査報告などを基礎データとして、各地域言語における間投表現の形式を整理し、その地理的分布を概観する。

(2) 基礎データの整理に基づいて、間投表現に関して特徴的な重点地域を選定する。間投表現の記述に必要な項目を検討し、データ収集のための談話の収録調査を企画する。

(3) 選定した重点地域においてさまざまな観点からできるだけ多くの方言談話を収集する。地域の伝統的方言の状況とその変化をとらえるため、複数の世代(高年層・若年層)について、2~3名ずつのグループによる方言の自然会話を収録(録音・録画)する。同一地点における世代間の談話の比較をおこなうことによって、「見かけの時間による変化」ではあるが、経年的な変化を探ることが可能となる。

(4) 収集した談話は、録音・録画をもとに、方言音声の文字化、共通語訳、注記付与をおこなう。文字化・共通語訳・注記は研究組織のメンバーで校閲し、正確な言語データとして利用できるように整備する。

(5) 実際の談話に現れた間投表現について観察し、間投表現の使用の実態とその機能について記述・分析する。1地点に複数の形式がある場合、「社会的属性によって使用する形式が違っているか」、「それぞれの形式はどのように使い分けるか」、「場面による切り替えの要因は待遇度以外に何が影響しているか」、「同じ形をとっていても地点ごとに機能が異なるということはないか」といったことを、実際の使用状況や文脈の中でとらえる。

(6) 間投表現の地域間の比較、同一地域の世代間の比較、場面の比較をおこなう。

4. 研究成果

(1) 『方言文法全国地図』第6集の「間投表現」項目により、間投助詞の形式を整理し、その地理的分布を概観した。

・第343図 役場になあ(B場面)

・第344図 役場になあ(A場面)

・第345図 役場になあ(0場面)

・第346図 行ったらなあ(B場面)

・第347図 行ったらなあ(A場面)

・第348図 行ったらなあ(0場面)

具体的な質問文は次のとおりである。

・0場面「親しい友達にむかって、「今日、役場に①なあ、行ったら②なあ」のように言うとき、「役場になあ、行ったらなあ」のところをどのように言いますか。」

・A場面「近所の知り合いにむかって、ややていねいに言うときはどうですか。」

・B場面「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うときはどうですか。」

「(役場に)①なあ」は、名詞を含む文末以外の文節に後続する場合、「(行ったら)②なあ」は動詞を含む文末以外の文節に後続する場合をたずねるものである。文法的な位置の違いがある2か所を設定し、各地におけるそれぞれの形式を求めている。

出現する間投助詞は、広い地域に見られる「ナ」「ノ」「ネ」「ヨ」や、特定の地域に現れる「ヤ」「クサ」「ニヤ」「ネヤ」「ナシ」「ネシ」「ノシ」「ナモ」「ナンシ」「ナンタ」「ノンタ」など、項目によって異なり、分布領域も多少違うが、共通する形式も多い。

第345図に現れる間投助詞については、次のような形式と分布が読み取れる。

・「ナ」類 北海道から岡山県あたりまでの広い範囲

・「ノ」類 中国、四国・九州・近畿の一部、東北・北陸の日本海側の各地

・「ネ」類 おもに九州

・「サ」類 ほとんど現れない

・「ヨ」類 東北・関東・沖縄など

・「ヤ」類 東北・沖縄

このほか、特徴的な形式として、「クサ系」が福岡・佐賀に、「ニヤ系」が長崎などに、「ネヤ系」が高知・愛媛などに見られる。

また、話し相手への待遇度の違いがある3場面を比較すると、出現語形や分布領域に異なりが見られる。場面による間投助詞の使い分けが観察できる。

・O 場面「親しい友達」に対する「くだけた形式」

・A 場面「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」

・B 場面「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」

「ナ」「ノ」「ネ」など、同じ形式の間投助詞でも地域により場面の現れ方や待遇度に違いがある。全体的な傾向として、場面が高くなるほど「ナ」「ノ」が減少し、「ネ」が増加する。しかし、鹿児島など、「ナ」と「ネ」について逆の使い分けの見られる地域もある。「近所の知り合い」や「この土地の目上の人」に対する地域の中での位置づけやことばの切り換えの認識が各地で異なっている可能性もある。

上位場面で分布が広がる「ノシ」「ナモ」、下位場面に多く現れる「クサ」「ネヤ」「ニヤ」「ヨ」(関東・東北)など、地域による特徴が観察される。一方で、場面にかかわらず同じ語形が用いられる地域もある。

(2) 方言の会話の記録である方言談話資料『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』を用いて、間投助詞の出現状況を把握した。

『方言文法全国地図』で当該地点およびその周辺地点に分布する形式が会話の中でも使用されるが、一方で、言語地図には明確な分布としては現れない形式が、会話の中では多用されている状況も指摘できる。

[秋田県湯沢市角間・1904(明治37)年生まれ(収録時73歳)・女性/1977(昭和52)年収録]

オレアエノ バッパヨー シュードバッパ ユーオンダケタ ナンデオ オナコ° ダジダンバ コーエ アノ ヤッコエ ドゴサナ ササルフンデヨ ソエデ ンー チョエト ナンデルドヨ ビリーッテ ユーオンダド

(私の家のおばあさんねえ、姑が言うものであった。なんでも、女たちならば、こういう、あの柔らかいところへね、刺さるようでね、それで、うん、ちょいとなでるとね、ぴりっというものだって。)

[東京都台東区・1911(明治44)年生まれ(収録時69歳)・男性/1980(昭和55)年収録]

トコロカ° ネー キョ オトトシカナー

オテーチャンノ テレビ ヤッテサ ソレデ フーゾクコーショー コッチカ° ウケモッテサー。ソーシタラ アレ ハイユースンカ° シキー フンジメヤーカ° ッタンダヨ。コマッチャッテサ。ソイデシンブントーヒョー サレテサー アンナーナー ナイ ト。

(ところがねえ、去、一昨年かなあ、「おていちゃん」のテレビをやってさ、それで、風俗考証をこっちが受け持ってさあ。そうしたら、あれ、俳優さんが敷居を踏んでしまいやがったんだよ。困ってしまってさ。それで、新聞投書をされてさあ、あんなのはないと。)

[奈良県五條市五條・1923(大正12)年生まれ(収録時58歳)・女性/1981(昭和56)年収録]
イヤ ワタシカッテナ アノ リョコーノ トキノナー キロクナ、アルバムイ ハッテナ シャシン。ホテー アノー ナニショー ト オモテ、イヤー センキョサンノ ミセテモータラナ イヤ コナイ シトイタ オモイデン ナルナー ト オモテ オモイモッテ コノ、ア、アノ シャシン タマッテシモテ。

(いや、私だってね、あの、旅行の時のねえ、記録ね、アルバムに貼ってね、写真を。そして、あの、あれをしようと思って、いやあ、仙居さんのを見せてもらったらね、いやあ、こうしておいたら、思い出になるなあと思って、思いながら、この、あ、あの、写真がたまってしまう。)

[愛媛県松山市久谷町奥久谷・1914(大正3)年生まれ(収録時67歳)・女性/1981(昭和56)年収録]

ダイデノー コーヤッテ ナワオノー アノ チャント タグッテノー ホイテ ソレオ イチワニシテノー ホイテ イチワナンボ ユーテ トベー モッテイキヨツタン。

(台でねえ、こうやって縄をねえ、あの、ちゃんと手繰ってねえ、そして、それを1把にしてねえ、そして、1把がいくらと言って、砥部へ持っていったの。)

[鹿児島県揖宿郡穎娃町牧之内飯山・1902(明治35)年生まれ(収録時75歳)・男性/1977(昭和52)年収録]

X10 ワ モー ムガシ タイショー タイショーナンネンチャッタガ タイショー チョード タイショー、ヒチハチネンチャラセンチャッタログ アタイカ° カコ° イメ オツ トッチャッタデ マダ ショセーノ ウヂ アダイカ° ゲシユクヂューカヂヤチョーニ アダシャ オツタカ° ゲシユクギー X11 オヂヤ X10 オヂヤ ッチュー アスツケ キオツタンヂヤ ニ

チョーピン ヒロ

(X10は、もう、昔、大正、大正何年だったか、大正、ちょうど、大正7、8年ではなかっただろうか。私が鹿児島市にいる時だったから。まだ書生の頃、私が下宿中、加治屋町に私はいたが、下宿までX11おじさんやX10おじさんたちは遊びに来ていたんだ。日曜日の日は。)

収録地点	収録時間	ナ系	ノ系	ネ系	サ系	ヨ系	ヤ系
秋田県湯沢市	28分49秒	37	0	0	0	22	0
東京都台東区	34分51秒	6	0	220	34	0	0
奈良県五條市	33分39秒	157	0	1	0	0	0
愛媛県松山市	31分48秒	38	100	2	1	0	0
鹿児島県揖宿郡	34分29秒	12	0	2	0	0	0

(3) 地域によっては、「あのな」「あのよ」を女性が使うことに違和感を持ち、「乱暴」「ぞんざい」「男っぽい」と感じたり、「あのね」を男性が用いることを「女っぽい」という印象でとらえたりすることがある。また、「あのさ」を「都会風」「東京っぽい」/「きざ」「気取っている」などのように、肯定的/否定的に評価することもある。さらに、地域によって、話し相手が目上か目下かで使える語が決まっていたり、くだけた場面でしか使えないなどの制限があったりすると、「なれなれしい」「失礼だ」という行き違いが生まれるおそれもある。このような間投助詞にまつわる印象・評価に起因する誤解・違和感といった地域間コミュニケーション・ギャップについても検討をおこなった。

(4) 昭和30年代に神奈川県鎌倉市の腰越小学校で起こり、全国に広まった「ネサヨ運動」、福岡県筑穂町の大分小学校で続けられ、1962(昭和37)年から3年間九州地域で展開した「ネハイ運動」、いずれも、本来の動機・実態は、ことばの使い方を考えようとする創造学習や社会へ出た時の基礎教育としての教育活動であったようである。「ネ」「サ」「ヨ」を「悪いことば」と意識して、なくそうとする行動と、「ネ」を「いいことば」と意識して、「ネ」をつけようとする行動、このふたつの活動の「ネ」に対する評価と志向する方向は逆である。また、それぞれの、「ネ」「サ」「ヨ」と「間投助詞なし」、「クサ」と「ネ」の認識の違いは、下位場面と上位場面での使用形式の差にも関連しているようである。こ

のような言語使用や言語意識の違いから生じる評価についても関連を探った。

(5) 間投表現に関して特徴的な重点地域として、大阪府大阪市、鹿児島県南九州市頴娃町、広島県広島市を選定し、高年層(70歳代)男女・若年層(20歳代)男女の方言談話の収録調査を実施した。収録した談話は、文字化・共通語訳・注記付与をおこない、言語データとして利用できるように整備した。基礎データのひとつである『全国方言談話データベース』には、1977(昭和52)年に収録された大阪府大阪市東区(現・中央区)における1898(明治31)年~1914(大正3)年出生の話者の談話、1977(昭和52)年に収録された鹿児島県揖宿郡頴娃町(現・南九州市頴娃町)における明治25年~1909(明治42)年出生の話者の談話、1977(昭和52)年に収録された広島県広島市古江東町(現・広島県広島市西区古江東町)における1899(明治32)年~1929(昭和4)年出生の男女の話者の談話が含まれている。これらの方言談話で用いられている間投表現と新規に収録した談話データを比較しながら、間投表現の形式・頻度・機能・使用状況などについて分析を進めた。また、世代間・方言間の比較を試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 文子 (INOUE Fumiko)

国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：90263186

(2) 研究分担者

熊谷 康雄 (KUMAGAI Yasuo)

国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：30215016

三井 はるみ (MITSUI Harumi)

国立国語研究所・理論・構造研究系・助教
研究者番号：50219672

(3) 連携研究者

井上 優 (INOUE Masaru)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：30213177

熊谷 智子 (KUMAGAI Tomoko)

東京女子大学・現代文化学部・教授

研究者番号：40207816